

佳作

## じいちゃんが残してくれたもの

茨城県ひたちなか市立那珂湊第一小学校六年 後藤 桃子

ひつぎの中の祖父は、私が最後に会った時の姿からは想像できないくらいほほはやせて、高かった鼻はより高くみえました。小学校最後の夏、お寺の息子だった祖父は、お浄土へ還っていききました。

人は死んだら天国に行くのかな、と思っていた私に祖母は、

「お浄土は仏様の国でね、じいちゃんの命が還る場所なんだよ。」

と教えてくれました。祖母は、初めてのおそう式で不安そうにしていた私に気づいて、そっと話しかけてくれました。おそう式の数日前、母は夜中に病院から呼び出しがあったり、おそう式の打ち合わせなどで忙しくて、なかなか私や家族と会話をする時間がありませんでした。いつもと違う数日間を、私は不安とさみしい気持ちで過ごしていたので、祖母が

声をかけてくれた時は、やっときん張がほぐれ、祖母の笑顔にほっとしました。

祖父はおしゃれでしゅ味が多い人でした。会場の入り口には、祖父がしゅ味で描いた大きな自画像がかざられ、おそう式の会場に来た人達を出むかえていました。死んでもからもサービス精神がおう盛なのは祖父らしいな、とクスツとしてしまいました。きん張がほぐれて、ゆっくり会場を見渡すと、会場にたくさんの人が来てくれているのが分かりました。認知症だった祖父は、私の身長が伸びるにつれて、家族や友人、たくさんのかんことを忘れていききましたが、逆に病気になるって何年も経つのに、祖父のことを忘れず、たくさんのかん人が会いに来てくれたことにびっくりしました。

祖母自身の言葉で、語りかけるように温かみのあるも主のあいさつは、祖母にしか伝えられないたくさんのかんを感じました。会場からは鼻をすする音が聞こえてきて、ふとなりをみたら、祖父が亡くなったから一度も泣いていなかった母が、ハンカチで目をおさえていたので、心臓がギュツとしました。私は祖父が亡くなった後、祖母は悲しくて心にぽっかり穴が開いてしまうのではないかと心配でした。

でも、会場にはたくさんのかん人がいて、祖母が祖父との思い出をなつかしそうに話しているのを見た時、祖父が残っていたものは、決して悲しさやさみしさだけではないような気がしました。祖母がきん張していた私に話しかけてくれた時、すごく安心しました。また、母が忙しくてあまり会話ができなかった時は、何となく気持ちも暗く、一日中やる気が起きませんでした。心のかんれあいがあるかないかで、自分の気持ちってこんなにも違うんだ、と気づいた時、祖父が残してくれたものは、人と人とのつながりだったのかもしれないと、分かった気がしました。心に穴が開いたとしても、人と人とのつながりが、気持ちを前向きに変えてくれるから大丈夫だよ、と祖父が最後に言ってくれているようでした。じいちゃん、教えてくれてありがとう。気をつけてお浄土に還ってね。